
好きになってもいいですか？

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きになってもいいですか？

【Nコード】

N4135U

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

行きつけの店で知り合った彼女に突然告白された。これって運命の出会いなんだろうか？それとも…。

第1話 好きになってもいいですか？

「好きになってもいいですか？」

行きつけの店で知り合った女の子と帰りが一緒だった。
二人っきりになった時に彼女が言った。

「僕でいいの？」

「はい！」

「いきなりだね」

「私は前から知っていたわ」

そつと手をだすと、彼女も自分の手を添えてくれた。

分かれ道…。

「僕はこっち」

「私はこっち」

でも、なかなか手を離すことができない。

「おやすみ」

僕が言うと、彼女はやっと手を離し、代わりにキスをしてくれた。

「おやすみなさい」

第2話 運命の出会い

まさか唇にしてくれるとは思わなかった。
さっきの“おやすみ”のキス…。

家に帰ってボーっとしていたらメールが来た。
彼女からだ。

『今日の出会いは運命だよ…』
ボクはちよつとドキツとした。
とりあえず返信。

『そうかもね』

そのまま数日が過ぎた。
なぜだかあの時のキスが忘れられない。
すると、また彼女からメールが来た。

『どうして連絡してくれないの？』
すぐに返信した。

『家庭がある人に気安くできないよ』

そう、彼女は人妻。

第3話 悪魔の誘惑

それからしばらく彼女のことは忘れていた。
彼女の方からも連絡はなかった。
もう、彼女の顔すら覚えてない。
でも、あの唇の感触だけは忘れられない。

仲間内での飲み会の帰り。

僕は一人で店を出た。

急に人恋しさを覚えた。

何気なく携帯を手取る。

無意識に指が動いていた。

『遊ぶ？』

送信。

彼女からすぐに返信があった。

『今どこですか？』

僕は今いる場所を告げた。

歩いてくる彼女を見て思った。

運命は変えられないのかもしれない。

第4話 二人きり

彼女は大きめの帽子を深くかぶっている。

顔は見えなかったが、雰囲気ですぐに彼女だと分かった。

「今夜はとても素敵だね」

思ったことを素直に言葉に出来た。

口べたの僕が。

なんだかおかしい。

酔っているせいかな…。

「どこに行く？」

「カラオケがいい」

カラオケなら通りの向かい側にある。

「よし！決まりだ」

僕が歩き出すと、少し後ろをついてくる。

人目を気にしているのかな…。

彼女がとても可愛く思えた。

そして、個室に二人きり。

第5話 待ちぶせ

カラオケボックスだとはいえ、密室に二人きり。健全に歌を唄う気分になれないのは当然かな…。

店員が飲み物を運んで来た。

取り合えず乾杯！

僕は彼女に『待ちぶせ』をリクエスト。

彼女のイメージにぴったり。

歌っている彼女の横顔に見とれる。

歌い終わった彼女が僕の方を向く。

彼女の唇がすごく近い。

ドキドキ高鳴る心臓の音が彼女に聞こえそうで恥ずかしい。けれど、目をそらすことさえできない。

そして、彼女がそっと目を閉じた。

第6話 長いキス

軽く唇に触れる。

いったん離れると彼女がうつとりした表情で僕を見つめている。

再び唇を合わせると、彼女は僕に体を寄せてきた。

僕は思わず、彼女を抱きしめた。

彼女の胸のふくらみを感じて自分を失いそうになった。

長いキス…。

舌が絡み合う。

しかし、突然、彼女が顔を遠ざけた。

「出ましよう…」

「えっ？」

「ここだと撮られているわ」

彼女が言いたいことはすぐに分かった。

僕も同じ気持ちだった。

店を出て、路地裏へ。

そこは…。

第7話 無邪気な寝顔

空いている部屋は二つあった。
最上階の部屋を選ぶ。

エレベーターの中で軽くキス。

部屋に入るとベッドに腰掛け抱き合う。
キスをしながら彼女の服を脱がす。

「あなたも脱いで」

彼女の言葉に促され、ボクも裸になった。

「シャワーを浴びる？」

彼女は首を横に振って僕に体を預けた。

僕達はそのまま一つになった。

明け方目を覚ますと、彼女はまだ眠っている。
昨夜の激しさが嘘のような無邪気な寝顔。

「運命か…」

僕は煙草に火を付けた。

第8話 帰り道

「朝になっちゃったね。家は大丈夫なの？」

「ええ。昨夜は実家に泊まることにしてあるから」

二人でホテルを出ると、外はすっかり明るくなっていた。

「さて、どうする？」

「あなたは？」

「僕は君と手をつないで歩きたいな」

「いいよ」

そして、彼女は恥ずかしそうに手を差し出す。

楽しい時間はあっという間だ。

そろそろ人目を気にしなければいけない。

「じゃあ、この辺で」

彼女は頷いて目を閉じる。

僕はそっと彼女の唇にキスをした。

第9話 彼女の日常

地元の商店街で彼女を見かけた。

子供と一緒にだった。

知らないふりをした方がいいのか迷った。

すると、彼女の方から会釈をした。

ボクも軽く頭を下げた。

あんなに大きな子供が…。

そんな風には見えなかったけど…。

初めて会った時の彼女の言葉を思い出した。

「私は前から知っていたわ」

僕は彼女のことをほとんど知らない。

だけど、もうそんなことはどうでもいい。

彼女が隣にいないと不安になる。

携帯を手取る。

『今度いつ会える?』

第10話 彼女のことを頭から離れない

『今度いつ会える?』

彼女からの返事はなかった。

どうしたんだろう…。

何かあったんだろうか…。

いてもたってもいられない。

心臓の鼓動が激しく波打つ。

彼女のことを頭から離れない。

「ねえ、今度の日曜日は休みかしら?」
妻がたずねる。

「休みだよ」

「同窓会なの。夕飯の支度頼めるかしら」
「いいよ」

その直後、彼女からメールが来た。

『日曜日の夜ならいいよ』

日曜日。

夕食の支度をとつとと終え、僕は待ち合わせ場所まで走った。

第11話 接点

居酒屋の個室席。

向かい合って座る。

隣で寄り添ってくれるのもいい。

でも、僕は彼女の顔が見られるから向かい合って座る方がいい。

今日は彼女のことをもっと知りたい。

「奥さんからよく話を聞いているの」

チームは違うけど、彼女もバレーボールをやっているということだった。

地元のチーム同士、交流があるのは当たり前。

「でも僕とは会ったことないよね」

「何度かあのお店で会っているのよ。」

そんな…。

まったく気がつかなかった。

第12話 優しいダンナ

「陽子のダンナって、優しくていいよね」

バレーボールの合同練習が終わって一杯やっている時によく聞く会話。

私のダンナは働いてお金を入れるだけ。
夫婦の愛情はない。

陽子さんのダンナさんって、どんな人なんだろう…。

後日、飲み会をしていると二人連れの男のお客さんがやって来た。

一人は顔見知りだった。

二人は楽しそうに話している。

私はもう一人の人がとても気になった。

「陽子が…」

もう一人の人の口から聞こえた。

この人！

第13話 胸の鼓動が加速する

私は気が付いたら席を立っていた。

「茂さん、こんにちは」

「なんだ、いたの？」

「はい。女子会で」

そんな会話をしていると、彼がちらっと私の方を見た。

「友達」

茂さんが彼を紹介してくれた。

彼は軽く会釈してくれた。

「奈津子―」

仲間らから呼ばれ、私は席に戻った。

でも、私の席からは背中越しで二人が見えない。

すると、他の仲間が茂さんに声を掛けた。

「ねえ、一緒に飲みましようよ」

私は胸の鼓動が一気に加速するのを感じた。

第14話 募る想い

私は思わず二人の方を見た。

茂さんは手をあげて応えてくれている。

そして、茂さんが彼に話しかけている。

二人がグラスを持って立ち上がった。

『やったっ！』

二人がやって来ると、仲間たちは二人に席を開けた。

私から一人おいて茂さん、彼はその向かいに入った。

茂さんのおかげで飲み会は盛り上がった。

私は彼と話したかったけど、何も話せずに女子会は終了。

その後、同じ店で何度か彼を見かけた。

その度に思いは募るばかりだった。

第15話 きっかけ

茂さんから電話があった。

『カラオケやってるんだけど、どう？』

もしかしたら彼も一緒かしら？

「誰がいるんですか？」

『この前、一緒にいた友達と信ちゃん』

信ちゃんは地元の議員。

「いいんですか？」

『来る？』

「はい、行きます」

どうしよう、なんだかドキドキしてきちゃった。

「今、友達呼んだから」

そう言って茂は俊哉を見た。

「誰？」

俊哉は聞いたが茂はニヤニヤするだけだった。

それからしばらくして女の子が一人入って来た。

第16話 彼女から目が離せない

「前に会ったろ？」

茂が僕に彼女を紹介した。

「そう？」

僕は全く覚えていなかった。

「まあ、いい。 なっちゃんここ座りな」

茂に促され、彼女は僕の横に座った。

茂が彼女に歌うよう勧める。

彼女は頷いて曲を入れる

すぐにイントロが流れる。

レベッカ。

彼女が歌い始める。

僕は鳥肌がたつほど驚いた。

『上手い！』

彼女から目が離せなかった。

しばらくして、茂と信ちゃんは次の日早いからと言って先に帰った。

僕と彼女だけがそこにいた。

第17話 彼女の笑顔がたまらない

彼女が水割りを作ってくれる。

何気ないしぐさにもドキツとする。

「歌わないんですか？」

少し考えてからリクエスト。

GLAY。

歌いながらも彼女の視線が気になる。

「お上手ですね」

彼女が拍手しながら言ってくれた。

照れくさいけど嬉しい。

「名前を聞いてもいい？」

「浅井です」

「僕は…」

「川村さん」

「えっ？」

「川村さんは有名ですから」

そう言う彼女の笑顔がたまらない。

「アドレス交換しましょう」

彼女が携帯電話を差し出す。

第18話 君は特別

赤外線でお互いのデータを交換。

「奈津子って言うんだ」

「はい。“ なっちゃん ” って呼ばれています。」

「なっちゃんか…」

ちよっとイメージが違うと思った。

「僕は“ みいこ ” って呼んでもいい？」

「みいこ？」

「子猫みたいに可愛いから」

恥ずかしそうに照れ笑いする彼女。

「私は“ トシさん ” って呼んでもいいですか？」

「いいよ」

「じゃあ、私もOKです。 でも、トシさん、誰にでもそう言っているんじゃないですか？」

「君は特別さ」

第19話 彼といられるだけで…

店は二人の貸し切り状態。

マスターが「そろそろ終わりだよ」と声をかけた。
時計を見ると、深夜の2時。

「じゃあ、帰ろうか？」

「はい」

こうして二人で店を出た。

二人で歩いた。

思い切って告白しよう。

そして、思いを伝えた。

奈津子は俊哉と親しくなれたことがとてもうれしかった。

そして、今も俊哉と二人でいられる。

居酒屋の個室で向かい合って。

奈津子は俊哉の隣に寄り添って座りたかった。

でも、彼といられるだけで満足だった。

第20話 彼のセリフは嫌みがない

彼は口数が少ない。

私の話を微笑みながら聞いていることが多い。

「トシさんも何か話して下さい」

少し困ったような顔。

「僕は楽しそうな“みいこ”の顔を見ているだけで幸せなんだ」
歯が浮いてしまいそうなセリフ…。

でも彼が言うのと嫌みがない。

私は恥ずかしくて下を向いた。

「どうしたの？」

彼が聞く。

「だって…」

「せっかく可愛い顔をしているのにもったいないよ」
顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。
益々顔をあげられない。

第21話 やっぱり可愛い！

彼女が下を向いたまま動かない。

「どうしたの？」

再度聞き直す。

「だって…」

「だって、どうしたの？」

「恥ずかしいよ」

「なんで？」

そう聞くと彼女はようやく顔をあげた。

「だって恥ずかしいよ」

「なにが？」

「私、そんなに可愛くなんかない」

上目使いに僕の方を見る。

顔が少し赤らんでいるようだ。

やっぱり可愛い！

「そんなことないよ」

僕は身を乗り出して彼女の顔を上向けた。

まわりに人がいないのを確認し、そっとキスをした。

第22話 きつと君のせい

彼の唇が私の口を塞いだ。

一瞬だったけど、とても長く感じた。

この人はどうしてこんなことが出来るのかしら。

こんな人初めて…。

それから珍しく彼の方から話を始めた。

「驚いた？ 僕も驚いた」

彼は今まで陽子さん以外の女の人と付き合った経験がないという。それなのに、こんなにプレイボーイみたいなセリフや行動を取ることに驚いているという。

陽子さんと付き合っているときにはこんなことなかったらしい。

「きつと君のせいだね」

第23話 彼の名前

彼の名前だけは以前から知っていた。

上の子が小学校に入学した年に彼はPTAの役員だった。

夏祭りの花火大会で彼がセッティングした設備はPTAの行事にしては本格的すぎるものだった。

それをやったのがすべて彼だったことはあとで知った。

PTAのバレーボール部に誘われた時、陽子さんがいた。

もう6年なので、PTAは今年で卒業だと言っていた。

そして、彼が陽子さんのダンナだということもその時知った。

もう卒業なんだ…。

第24話 彼の顔は…

翌年の夏祭りの設備もすごかった。

きつと彼だわ

そう確信した。

卒業しても手伝ってくれているんだ…。

私は腕章をして忙しそうに走り回っているお父さんたちを観察した。
どの人だろう…。

結局分からず仕舞だった。

その後、夏祭りは規模を縮小し、これまでのような設備は必要なくなったらしい。

彼の顔を確かめられなかった。

それから数年経った。

彼のことはいつの間にか忘れていた。

そして、親友に誘われて私もクラブチームに入った。

第25話 彼女しか見えない

「きつと君のせいだね」

彼女の顔が更に赤くなった。

キスのせいなのか、今の言葉のせいなのかは分からない。

「そんなにからかわないでください」

今度は少し口を尖らせて彼女が言う。

そんな表情も可愛い。

「イヤなの？」

「はい！ からかわれるのはイヤです」

今度は少し困った顔。

僕はちよつと意地悪してみたくなった。

「じゃあ、付き合うのをやめる？」

「ダメエ！」

そう言っで彼女は僕の手を握りしめた。

もう僕には彼女しか見えない。

第26話 君が誰かに取られないか心配だ

「バカだなあ！ 冗談だよ」
彼が言う。

私は我慢できなくなって彼の隣に座った。
体を寄せて彼の手を取る。
両手で包み込むように握りしめる。

「可愛いなあ」
彼がつぶやく。

「そんなことない…」
そう言いかけた時、また彼が私の唇を塞ぐ。
今度はさつきより少し長いキス。

しばらくして彼が呟いた。

「君は可愛いから心配だよ」

「えっ？」

「誰かに取られないか心配だ」
一瞬だけ見せた彼の不安そうな表情。
「そんなことないよ。私だって…」

第27話 彼が欲しくてたまらない

「私だって心配だわ」

そう、彼はとても優しい。
特に女性には。

陽子さんたちが話しているのを聞く限り。

彼女たちは口を揃えて言う。

『陽子のダンナは素敵よね』

陽子さんは笑って答える。

『ダメよ！ あげないからね』

そんな会話を聞きながら、私は彼が欲しくてたまらなくなっていた。

「私もトシさんが他の女の人と仲良くしているのを見るのはイヤ！」
彼は笑って頷く。

「そんなことはしないさ」

『陽子さんとも…』

私は心の中で呟いた。

第28話 どうしよう…

私が入ったチームは陽子さんのチームとは別のチーム。

彼のことは忘れていたし、純粹にバレーボールが楽しかった。

弱小チームだけどやりがいがあった。

今思えば結果オーライ。

同じチームだったら今は陽子さんの顔をまともに見られない…。

「今度PTAの地区大会があるんだよね？」

「はい」

「応援に行つてあげるよ」

と彼。

嬉しい。

そんな時、陽子さんがPTAのチームにマネージャーとして入ってくれることになった。

どうしよう…。

第29話 嬉しいけれど素直に喜べない

陽子さんは二人の子供が通っていた9年間、この小学校のPTAチームを引っ張ってきた人。

私たちにとっては雲の上の存在。

入ってくれるのはありがたいこと。

でも、今の私は動揺している。

何とかごまかさなくちゃ。

大会当日、彼と茂さんが応援に来てくれた。

嬉しいけれど素直に喜べない。

彼はベンチの陽子さんを見かけて声をかけている。

夫婦だもの。

仕方ないよ。

そう思っても冷静でいられない。

集中しろ！

そう自分に言い聞かせる。

第30話 複雑な想い

最初の試合は2－0から逆転負け。

緊張とベンチが気になって上手くトスがあげられなかった。

「惜しかったね」

試合後に彼が声をかけてくれた。

嬉しいけれど、怖かった。

彼と私が顔見知りだということを陽子さんには知られたくない。

幸い、陽子さんの姿はなかった。

私はホッとした。

「次もがんばってね」

「はい」

「陽子がいたね」

「マネージャーで入ってくれているんです」

「ふーん…」

夫婦なのに知らない？

私はなぜか嬉しくなった。

第31話 彼女は誰よりも輝いていた

コートでトスをあげている彼女はとても輝いて見えた。
この会場にいるどの女性よりも。
もちろん、陽子も含めて。
僕はますます好きになった。

「あいつ、今日はずいぶん緊張しているなあ」
試合を見ながら茂が言う。

彼女のことだ。

ボクにもそれは分かった。

きっと陽子がいるせいだろう…。

2試合目は優勝候補の学校といい勝負をした。
でも最後は突き放されて2戦2敗。

準決勝には進めなかった。

会場を後にするとき彼女が僕を見ていた。

第32話 今どうしていますか？

彼が会場を去ったら、急に寂しくなった。

試合後のミーティングは何も頭に入らなかった。

「…ねえ、聞いてるの？」

陽子さんの声。

「具合でも悪いの？」

「大丈夫です…」

このあとは打ち上げ。

陽子さんも参加する。

「なっちゃん、具合が悪いなら無理しなくてもいいわよ」
陽子さんが心配してくれた。

「すみません。じゃあ、今日はこれで」

みんなと別れると、すぐに携帯を取り出した。

彼の名前を探す。

『今どうしていますか？』

送信…。

第33話 いつものシャンプールの香りが心地いい

僕は家に戻って夕食の支度をしていた。

そこにメールの着信。

彼女からだ。

『今どうしていますか？』

『家で飯の支度』

また彼女からすぐに返信。

『出られますか？』

『みいこはこれから打上げでしょう？』

『具合が悪いと言って断りました。 会いたい…』

僕も会いたかった。

電話で場所と時間を指定した。

適当に支度を済ませ家を出た。

少し遅れて彼女はやって来た。

そして、僕にしがみついてきた。

いつものシャンプールの香りが心地いい…。

第34話 頭の中の映像

俊哉の頭の中をテレビの画面に例えると、こんな具合かもしれない。普段はもちろん奈津子の映像。

仕事の時なども、必ず子画面が出ていて、そこにはいつも奈津子が映っている。

俊哉はハイボールをクラッシュアイスで、奈津子はライムサワーを頼んだ。

「もっと会えればいいのに…」
物憂げな表情で彼女は言う。

それは僕にとっても同じこと。

あの日以来、彼女が隣にいないことに違和感さえ覚える。

「じゃあ…」

僕はあることを提案した。

第35話 提案

「じゃあ、ソフトをやってみない？」

僕が言ったのはPTAのソフトボールのことだ。

僕は卒業しているけれど、僕が立上げたチームなので今でも顔が聞く。

ソフトをやっているれば、今よりはずっと会う機会も増える。

「でも、ウチはまだ入学していないわ」

「来年だろう？」

「そうだけど…」

「じゃあ、体験入部でどう？」

「でも、トシさんに紹介されるのは…」

彼女の言いたいことはすぐに分かった。
僕との関係を疑われたくないのだろう。

第36話 緊張の初対面

秋の地区大会が雨で流れた。

その日は昼から宴会になった。

そして、二次会でカラオケに移動。

僕は彼女にメールした。

『チームのみんなとカラオケにいるけど来ない？』

『行きたいけど行きづらいよ…』

『大丈夫だよ』

『じゃあ、茂さんから…』

茂とは顔なじみなので、その方が自然だと彼女は言った。

僕は茂に話してそうしてもらった。

『今、店の前にいます』

『早くおいで』

緊張した顔で彼女は入って来た。

チームメイトと初のご対面だ。

第37話 アイドル誕生

茂が手招きすると、彼女は茂と僕の間に座った。
その瞬間、彼女に注目が集まった。

「だれ？」

みんな、可愛い“みいこ”に興味津々。
彼女を知っている者もいたが、ほとんどは初対面。
あらたまった紹介はせず、自然の流れで一緒に飲んだ。

次第に彼女の緊張もほぐれてきたようだ。
彼女がカラオケを披露すると、みんなが彼女の歌に聞き惚れた。

その後、僕は機会があれば彼女を呼んだ。
そうして彼女はチームのアイドル的存在になった…。

第38話 幸せな気持ち

俊哉がソフトボール部を支えているのは前から知っていた。
長女が入学したらソフト部に入るつもりだった。

俊哉に近づきたかったからだ。

しかし、その前に願いが叶った。

それで十分だった。

改めて俊哉からソフトボールに誘われたのは嬉しかった。
他のメンバーもいい人ばかりだ。

「楽しくなりそうだわ」

奈津子は幸せな気持ちだった。

そんなところに俊哉からメールが入った。

『今度、ソフトの忘年会やるからおいで』

トシさんったら…。

第39話 そんなに簡単じゃないのよ

「トシさんったら、いつも一方的なんだから」

奈津子は嬉しかった。

でも、素直に受け入れられない事情もある。

周りの目だ。

女性が外に出るということは、ゴシップ好きのオバサン達の標的に
なりやすいのだ。

奈津子のように外から入っていた人間に対しては特にそうだ。

奈津子は俊哉に返信した。

『行きたいけど、行けないよ』

『大丈夫だよ！偶然会ったことにすればいい』

トシさんの気持ちは嬉しいけれど、そんなに簡単じゃないのよ…。

第40話 迷い

奈津子はなんだか落ち着かない。

そう、今日は俊哉たちが忘年会をやっている。

本当は行きたくて仕方がない。

「なあ、今日は出かけるんだろう？ まだいいのか」

今日はダンナが子供達を見てくれることになっている。

「もう出ます」

そう言うのと、とりあえず家を出た。

そして、俊哉にメールしてみる。

『本当に大丈夫ですか？』

『大丈夫だよ！ 不安なら迎えに行こうか？』

奈津子はまだ迷っていたが、既に会場の近くまで来ていた。
すると…。

第41話 必然的な偶然

私は迷いながらも、会場の近くまで来ていた。

ふと視線を上げると、彼がこっちに歩いて来るのが見えた。

「偶然だね」

彼はそう言って微笑んだ。

「買い物？」

そう言いながら、自分が持ってきたコンビニの袋を私の手に預ける。

「何を買ったの？」

そう言って袋の中を覗き込んだりする。

「ところで…」

そして、今度は私の手を引いて歩きだした。

会場に着くと彼はこう言った。

「タバコ買いに行ったら、なっちゃんに会ったから連れてきた」

第42話 彼女がいないと上の空

僕は早く彼女に会いたかった。

忘年会は盛り上がっていたけど、僕は上の空。

そんなとき彼女からメールが来た。

僕は居てもたってもいられなくて店を出た。

コンビニで適当に生活用品を買った。

コンビニを出ると彼女が見えた。

僕は偶然を装って声をかけた。

彼女を店に連れていくと、みんな歓迎してくれた。

僕は彼女に空いている席を指して座らせた。

そして、参加賞のスクラッチカードをこっそり渡した。

それから僕は自分の席に戻った。

第43話 不安

彼は店に着くと、参加賞だと言ってスクラッチカードを1枚出した。

「私はいいですよ」

私は遠慮して返そうとした。

「いいから！」

そう言っただけで彼は自分の席に戻った。

「貰ったよ。余ってるんだし」

先日知り合った克也さんもそう言うので頂くことにした。

そして彼の方を見た。

私は心臓が止まりそうになった。

彼の横に本部の女性役員が三人いたのだ。

私がここにいることをあの人達はどう思うかしら。
そう考えたら急に不安になった。

第44話 僕がついているから

せっかく彼女を連れてきたのに離れているのは寂しい…。
自然と彼女の方に目が行ってしまう。

不安そうに、こっちを見ている彼女と目が合った。
理由は分かる。

「実は…」

僕は彼女を連れてきた経緯を説明した。

「ふうん…。良かったじゃない」

本部の女性達が納得したかどうかは分からない。

「ちょっとごめん」

そう言って、僕は席を立った。

「私、やっぱり帰るよ」

「ちゃんと説明したから大丈夫だよ」

「でも…」

「僕がついているから」

第45話 頑張ってね

僕はしばらく彼女のそばにいた。

他のメンバーも彼女に話しかけ始めた。

彼女も少し安心したようだ。

そうこうしているうちに女性役員の一人、吉田さんがやって来た。

「ソフトやるのね」

「はい、来年から」

「頑張ってね」

吉田さんは裏表のない人だ。

彼女とも自然に話してくれている。

彼女の表情も次第に和らいできた。

とりあえず安心だ。

しかし、向こうの二人は要注意だ。

その時、茂から声がかかった。

「トシ、そろそろ始めようか？」

第46話 お楽しみ抽選会

茂さんから声がかかると彼は私にウィンクした。
何かの合図なのだろうか…。

「それでは今からお楽しみ抽選会を行います」
彼が抽選会の司会を始めた。

「お手元の…」
どうやらさっきのスクラッチカードを削ると景品がもらえるようだ。
みんな待ってましたとばかりにカードを削り始めた。

「やった！ 2等だ」
ヒロさんが真っ先に手をあげた。

「なんだよハズレか」
そんな声もちらほら。

「なっちゃんも削りなよ。1等出でないよ」
「でも…」

第47話 クリスマスプレゼント

克也さんはそう言うと、私のカードを取り上げて削り始めた。

「おっ！ 何か当たってるかも」

「まさか…」

私は自分の目を疑った。

そこには『特賞』と書かれてあった。

「すげえ！ なっちゃん特賞だ」

克也が叫んだ。

みんなの目が一斉に私の方へ向く。

彼が頷きながら私の方へ来た。

賞品を持って。

「おめでとう！ クリスマスプレゼントだよ」

そう囁いて彼はウィンクした。

「早く開けてごらん」

私はそっと中を覗いた。

新品のグローブだった。

第48話 君はそういう運命なんだ

スクラッチカードは同じ種類のカード毎に売られている。

『ハズレ』以外は1枚ずつ混ぜる。

僕はその中から、『特賞』のカードだけ抜き取ってポケットにしまった。

“みいこ”にこっそり渡すためだ。

ソフトを始める彼女のためにグローブを買った。

ただでは受け取らないと思ったので、抽選会で当てさせようと思った。

「おめでとう！」

彼女はびっくりしていた。

その顔がまたたまらなく可愛い。

「どうして？」

「君はそういう運命なんだ」

第49話 強運

「なに、なに？」

克也さんが興味津々で私が受け取った包みの中を覗き込む。

「うわっ！　すごい」

さっそく手にとって、しみじみと眺めている。

「これ、相当するでしょう？」

彼は笑って頷いている。

私にはグローブの値段なんて分からないけれど、安物ではないことは一目で分かった。

「2万くらいするんじゃないの」

克也さんは興奮している。

「えっ？　そんなに」

「なっちゃんは強運だね」

彼はサラッと言った。

「だけど…」

でも、嬉しい。

第50話 彼と一緒になら

抽選会が終わると女性役員三人は帰って行った。
ホッとした。

そのあとはカラオケタイムで盛り上がった。

店を出たのが深夜3時。

「一緒に帰ろう」

彼が声を掛けてくれた。

「はい」

やっと二人きりになれる。

そう思ったら背後から声が…。

「俊哉さん、腹減らないっすか？　メシ行きましょうよ」
いちばん若いユウ君だ。

お願いだから断って…。

「いいね！　なっちゃんもどう？」

「えっ？」

「大丈夫？」

「はい…」

仕方ない。

でも彼と一緒になら。

第51話 私の主婦

結局、朝までファミレスに3人。
ちよつと、欲求不満。

家に着いたら彼からメール。

『朝まで君のそばにいられて幸せだったよ』
私もすぐに返信する。

『私も楽しかったです。プレゼントありがとうございます』

少しだけ仮眠をとったら私は主婦に戻る。

朝食はトーストにハムエッグ。

それから、サラダ。

温めたミルク。

休日出勤のダンナを送り出したら、掃除。
そして、昼食。

子供たちは冬休み。

一日中家にいる。

彼はどうしているかしら…。

第52話 相談したいことがあるんです

『相談したいことがあるんです。 時間ありますか』

彼女からのメール。

年が明けて間もなくのことだった。

居酒屋のカウンター席。

嫌な予感がする。

彼女が口を開いた。

「実は…」

彼女がソフトを始めるといふことで子供達がグローブを買ってくれたらしい。

どっちを使ったらいいか迷っているというのだ。

「それなら、子供たちに買ってもらった方を使うべきだよ」

「いいんですか？」

「もちろん！」

ホッとした。

別れ話でなくて良かった…。

第53話　ずっと二人でいられたいいのに

「よかった」

彼は神妙な顔つきで言った。

「どうしたんですか？」

「別れ話でも切り出されるのかと思ってた」

「そんなわけないじゃないですか」

「本当によかった」

彼がホッとしているのがよくわかる。

そして彼は続けた。

「僕にはもう“みいこ”しかないから」

そこまで私を愛してくれているのね。

なんだか胸がいっぱいになってきた。

「私もトシさんだけですよ」

私も彼以外の人は考えられない。

「ずっと二人でいられたらいいのにな」

第54話 こんな時に限って…

夕方から体がだるい。

家に帰って、念のために熱を測ってみた。
39度6分。

インフルエンザかもしれない…。
食事も取らず布団に潜り込んだ。

陽子が帰ってきて事情を話した。
とりあえず、熱さましの薬を買って来てくれた。

翌朝、病院で診察を受けた。
やはりインフルエンザだった。
僕は家族と隔離された。

夕方、メールが入った。
彼女からだ。

『今夜、時間ありますか？』
なんで、こんな時に限って…。

『たっぷりあるけど、会えない…。』

第55話 会えない不安

『たっぷりあるけど、会えない』
彼からの返信。

えっ？

今までこんなことなかったのに…。

嫌われたのではないか？

もしかして陽子さんにバレた？

不安でたまらない。

もう一度メールしてみよう。

『具合でも悪いのですか』

すぐに返事がきた。

『インフルエンザなんだ』

そんな！

でも、私にしてあげられることはない。

こんな時にそばにいてあげられないなんて…。

無意識に陽子に看病されている俊哉の姿が浮かぶ。
陽子さんさえいなければ…。

第56話 彼の心配り

ダメ！

そんなことを考えてはいけないわ。

今は彼が早く治るように祈りましょう。

その後、彼から定期的にメールが入った。

『熱は下がったから心配しないで』

『医者 of 許可が出るまでもう少し待つて』

私が心配しないように心配りしてくれている。

そんな時、娘の学校がインフルエンザで休校になった。

娘にも症状が出ていた。

診察したら反応が出た。

そして、私にも。

『もう、いつでも会えるよ』

どうしてこんな時に…。

『ごめんなさい…』

第57話 久しぶりの彼の笑顔

『ごめんなさい。 今度は私が…』

えっ！

仕方ない。

でも、まさか僕のがうつったのではないだろうな…。
こんな時にそばにいてやれないなんて。

あっ…。

彼女もそんな風に思っていたのかなあ…。

僕は彼女にメールした。

『“可愛いみいこ” お大事に！ ゆっくり休んで…』

彼からのメール。

『…治ったら美味しいものを食べに行こうね！』

1週間もすると私も完治した。

彼の職場の近くにあるイタリア料理のレストラン。

久しぶりの彼の笑顔…。

第58話 出会うのが遅すぎた

「大変だったね。お互いに」

「でもよかった」

彼女のホッとした顔が心地いい。

「トシさんはこういうところで働いているんですね」

「会社は大したことないけどね」

「でも、大丈夫？」

「何が？」

「会社の人に見られたりしたら…」

「地元で誰かに見られるよりはマシだろう」

「そうですけど…」

「顔見知りに出たら“妻”だと紹介するよ」

「そんな、恥ずかしい…」

本当に出会うのが遅すぎた。

僕はそう思いながら、彼女の顔を見つめた。

第59話 一緒に帰りたいけど…

僕は店を出たところで彼女と別れた。

本当は一緒に帰りたいけど、電車の中では誰が見ているか分からないから。

家に帰ると陽子が既に帰っていた。

時計を見ると11時を回っている。

バレエの時はいつもこのくらいの時間になる。

「パパ、ご飯は？」

「食べてきた」

「寝る前にお米といでおいてくれる？」

「いいよ」

「私お風呂入ってくるから」

そう言って陽子はバスルームに消えた。

携帯電話が震える。

彼女からだ。

『今日はこちらそうさま』

第60話　そこにいるのが彼だったら…

家に帰ると、子供達はゲームをしていた。
ダンナは風呂からあがったところだった。

「今日の女子会どうだった？」

そんな言葉でも掛けてくれればいいのに。

ダンナは冷蔵庫からビールを出し、黙って一人で飲み始めた。

『“可愛いみいこ”がそばにいたから僕は胸がいっぱいで何を食べたかも覚えていないよ…』
彼からメールの返信。

チラッと旦那の方を見る。

そこに座っているのがトシさんだったら…。
そう思うと、涙が溢れそうになった。

第61話 緊張の初体験

『今度の日曜日に練習あるから、おいで』
『はい』

とりあえず、運動できる格好で家を出た。

着いた時にはもう始まっていた。

キャッチボールしていた彼がすぐに気づいてくれた。

一旦、練習を中断して彼がみんなを集める。

「紹介します。今日から体験で…」
既に顔馴染みだとは言え、緊張する。

キャッチボールで体を温めたら、ノックが始まった。
ノックをするのはイチローさん。

私の番が来た。

緩いゴロ。

取れた。

なんだか、気持ちいい。

第62話 いい感じ！

僕は彼女がノックを受けるところを見ていた。

運動は初めてではないので、そう心配はしていなかった。

イチローちゃんが緩いゴロを打ってくれたようだ。

ほー！

打球が緩いのもあるけれど、彼女は前に出てボールを取った。

「なっちゃんやるねえ！ 上手じゃない」

みんなが彼女を褒めまくる。

うん！ 確かにいい。

そして、フリーバッティング。

僕がバッティングピッチャーをかってでた。

彼女が打席に入る。

自然ないい構えだ。

表情もいい…。

第63話 嫌な予感

「あの子いいねえ」

練習後、一杯やりながらイチローが言った。

「川村さん、彼女どこで見つけてきたんですか？
イチローが聞いてきた。」

「陽子のバレー絡みで」

「本当に初めてなんですか？」

「ソフトはね」

「いやー、でも上手だなあ」

どうやらイチローは彼女のことを気に入ったらしい。

イチローはバツ1の現在独身。

「今日はもう帰ったんですか？ 川村さん、誘わなかったんですか？」

「そりゃあ、主婦だからね」

何か、嫌な予感が…。

第64話　すぐに行きます

『練習どうだった？』

彼からのメール。

『楽しかったです。トシさんはまだ飲んでいるのですか？』

練習後はいつも夜中まで飲んでいると彼から聞いていた。

今日はダンナがいるので、これから出かけても大丈夫かな…。
そう思って彼にメールした。

『これからカラオケに移動するけど来る？』

『誰がいますか？』

『茂君、キャプテン、イチローとボク』

イチローさん？

珍しいな。

イチローはカラオケに来たことがなかった。

『すぐに行きます』

第65話　そういうことなの？

4人でカラオケに行くと間もなく彼女がやって来た。

「あれっ？　どうしたの？」

イチローがすぐ彼女に気付いた。

「僕が呼んだ」

そして、彼女は僕の横に座った。

「そういうことなの？」

イチローは少しがっかりしたようだった。

「えっ？　どういうこと？」

その会話を聞いていたキャプテンの砂川が身を乗り出した。
砂川は最年長だが空気が読めない。

「何だっていいじゃん」

茂がはぐらかす。

「川村さんも隅に置けないな」
「にやつくイチロー」。

第66話 こいつはヤバイ！

「変な勘繰りはするなよ」

彼女が歌っているときに僕はイチローに釘を刺した。

「川村さんの彼女には手を出さないよ」
そう言ってウインクするイチロー。

彼女が歌い終わって席に戻ってきた。

「初めて聞いたけど上手いねえ！」
イチローが拍手しながら彼女を褒める。

「イチローさんも歌って下さい」
彼女がイチローにカラオケを勧める。

「僕は1曲しか歌えないんだ」
イチローが曲を入れる。

彼女の目が輝いている。

こいつはヤバイかも…。

第67話 僕は僕

イチローはやたらと彼女に話しかける。

彼女もイチローと話をするのが楽しそうだ。

僕はちよつと焦っていた。

だけど、彼は彼。

僕は僕。

彼女が僕を好きになったのはそれなりの理由がある。

しゃべって楽しいヤツは他にもいる。

そう思って気を取り直した。

いつの間にか深夜2時。

「この辺で解散しよう」

茂が言った。

僕と彼女以外は違う方向へ帰って行った。

いつものように僕たちは二人で歩いた。

そして、いつもの場所でおやすみのキス。

第68話 彼はいつも気を使ってくれる。だけど…

『今日は楽しかったです。 またお願いします。』
送信。

彼にメール。

『無事に帰れたみたいだね。 家の方は大丈夫？』
彼からすぐに返信メール。

ふふ…。

トシさんったら！ いつも気を使ってくれる。

『はい！ 大丈夫です。 おやすみなさい』
『おやすみ…』

私はシャワーを浴びて子供たちの横で休んだ。
ダンナは一人、書斎で寝ている。

横になると、今日1日のことが思い出される。
初めてやったソフトボールのこと…。
そして、イチローさん…。

第69話 揺れる気持ち

「イチローちゃんは“みいこ”のことを気に入ったみたいだよ」

隣の居酒屋。

彼が言った。

あの時のことを気にしているのかしら…。

「心配しないで下さい。 私にはトシさんだけですから」

「いや…。 そういうつもりじゃ…」

そう！ 私には彼しかいない。

自分に言い聞かせる。

ただ、そうしないと自分でも不安になる。

ずっと彼を思い続けていた。

やっと願いが叶った。

一時の気の迷いで、この幸せを失いたくはない。

でも、なんだか怖い…。

第70話 何だか悲しい

4月。

娘が入学した。

これで正式にソフトボール部員だわ。

正式部員としての最初の練習日。

私は少し不機嫌になった。

私の他に女性の新入部員が3人来ていた。

彼が親切に彼女たちに声をかけてあげている。

彼の立場では仕方のないこと。

でも、どうしてかしら…。

何だか悲しい。

「なっちゃん、キャッチボールしようか」

声を掛けてくれたのはユウ君だった。

練習後、ユウ君に聞かれた。

「なっちゃんって川村さんと付き合ってるんですか」

第71話 よろしくネ

「ちょっと嬉しいかも」

3人の女性新入部員を見て茂が言った。

「そうだけど、男が来ないのは問題だぞ」

中学は3年間。

あっという間だ。

下の学年に人がいないと部が成り立たない。

僕は新入部員に一通りのことを説明した。

ちょっと彼女が気になってグラウンドの方を見た。

彼女はユウジとキャッチボールをしていた。

練習後、新入部員の一人、篠塚さんが声をかけてきた。

「よろしくネ。私もユーカーなの」

ユーカーは陽子のバレーチーム。

第72話 何だかおかしい

「付き合ってるんですか？」

気のせいか、ユウ君の目がいつもと違う気がする。
なんて答えようか…。

彼とのことが知られるのはまずい…。

「そんなわけないじゃない」
私はそう答えた。

すると、ユウ君は満足げに帰って行った。

その後、よくユウ君と顔を合わせる。

平日の昼間。

「最近よく合うね」

「そうですね。 なっちゃんちってこの辺なんですか？」

「このマンションよ」

「そうですか。」

こんな時間にいるなんて、何だかおかしいわ…。

第73話 視線の先には…

彼女がソフト部に入ってから会う機会は増えた。
彼女の顔が見られるのは嬉しい。
だけど…。

『たまには二人で会いたい』
そうメールした。
返事はない。

どうしたんだろう…。

次の練習日。

「どうした？ 最近忙しい？」
「そんなことは…」

そう答えた彼女の視線が定まっていない。
その視線の先にはイチローがいる。

「それならいいけど…」

練習が始まった。
女性3人はセカンドに入った。
すると、彼女はイチローになにやら声をかけている…。

第74話 気になる視線

いつも外野にいるイチローさんが今日はファーストにいた。

「一塁手って難しいんですか？」

セカンドが嫌なわけではないけれど、やるからには試合にも出たい。それなら、競争相手のいないポジションがいい。

私はそう思った。

「やってみる？」

「はい！ やりたいです」

私がファーストに入った。

イチローさんがそばで色々教えてくれる。

三塁からの送球が来る。

ふと視線に入ってきたのはレフトのユウ君。

何だか私を睨みつけているみたい。

第75話 やっぱり彼女はセンスがいい！

彼女が一塁に入った。

「なるほど、いい選択だ」

このチームには固定した一塁手がない。

イチローが教えるなら彼女でもモノになるかも知れない。

ぎこちないけれど、キャッチングはしっかりできている。

普段は悪送球の多いヒロが彼女にはいい球を送球する。

「川村さん、やっぱり彼女センスいいね」

休憩時間にイチローが言う。

「これはめっけもんだな」

二人で話していると、彼女がチラッとこっちを見た。

そして、雄二と談笑している。

第76話 悪夢の予感

さっきのユウ君の視線が気になる。
何だか私に対して怒っているみたい。

休憩に入ったのでユウ君に声をかけた。

「いや、一生懸命見てただけです」
そう言ってユウ君は笑った。

私は彼の方を見た。

イチローさんと話している。

目が合った。

彼が微笑む。

私は頷いてまたユウ君に話しかけた。
すると、彼が私を呼んだ。

「じゃあ、行くね」

そう言った途端、一瞬、ユウ君の目の色が変わったように見えた。

私は得体のしれない恐怖心に襲われた。

第77話 歓迎会

『新入部員の歓迎会やろうか？』

茂からのメール。

会場はいつものカラオケ屋。

新入部員は女性4名。

時間になったので茂が挨拶をして歓迎会が始まった。
彼女だけまだ来ていない。

僕と滋の周りに3人の女性が集まった。

「ちよっと、そこずるいよ」

雄二が茶化す。

「特に川村さん、なっちゃんが来たら怒るよ」

「へー、川村さんってそうなんだ」

小山さんがつぶやく。

小山さんは陽子と同じバレーのチーム。

「何が？」

僕はちよっと焦った。

第78話 興味津々

「雄二、変なこと言うな」

僕は雄二を怒鳴った。

「冗談ですよ。 そんなムキになんないで下さいよ」

雄二は笑いながらビールグラスを手取る。

小山さんの目が、もう興味津々でたまらないといった感じだ。

ちょうどその時彼女が遅れてやってきた。

彼女はすぐに僕の方を見た。

僕も一瞬だけ彼女の方を見た。

彼女は空いている席を探しながら奥へ歩いていく。

小山さんが交互に僕たちを見て微笑んだ。

「陽子ちゃんには言わないから大丈夫よ」

第79話 疑惑

こんな時に限って遅れるなんて。

彼の周りには既に他の女性部員が座っていた。
奥でユウ君が手招きしている。

仕方なくユウ君の前に座ることにした。

「川村さんはモテますね」

ユウ君が言った。

「そうだね」

私はそう言って、もう一度彼の方を見た。

「気になるんですか？」

ユウ君がビール差しだした。

「そんなことないわ」

私は否定しながらグラスを持った。

ユウ君は私たちのことを疑っている。

私はそう確信した。

なんとかしなくちゃ…。

第80話 窮地

『マズイわ！ ユウ君が疑っている』

私はトイレに行くふりをして彼にメールした。
すぐに返事がきた。

『こっちも小山さんがヤバイよ』

えっ？ 小山さん？

確かに小山さんはマズイ。

陽子さんと同じチームだもの。

トイレを出ると私は引き攣った。

小山さんが私のいた席にいる。

私に気がつくのと、隣に座るように言った。

「川村さんって、優しいよね」

と、小山さん。

いきなりきた。

「そうですね」

そう答えるのが精いっぱい。

心臓が破けそう…。

第81話 針のむしろ

「好きなの？」

「はい」

あっ！ どうしよう…。

小山さんに聞かれて、思わず“はい”と答えてしまった。

「いいのよ。でも、彼って隠れファンが多いから競争率高いわよ」

「…」

私は何をどう答えればいいのか分からなかった。

「あら、心配ないわよ。陽子ちゃんはオープンだから」

「…」

「モテるダンナが自慢なのよ」

「…」

「でも、程々にネ。さあ、歌でも歌いましょう」

そう言うと小山さんはカラオケをリクエストした。

早く帰りたい…。

第82話 僕が上手くやるから

カラオケが始まった。

中森明菜の『十戒』。

歌っているのは小山さん。

「いいっすねえ」

雄二がノリノリで手拍子する。

そして自分の曲をリクエスト。

会場は次第にカラオケモードに突入。
みんなが立ち上がって熱唱している。

私はなかなかノリ切れない。

彼は盛り上がっているみたい。

彼のグラスが空になっている。

私は彼の席に行った。

私に気が付くと彼が隣に座ってくれた。

「僕が上手くやるから」

そう言って彼は私の頭を撫でてくれた。

第83話 意味ありげな笑み

水割りを作っている彼女の表情が暗い。

「みいこも歌って」

僕はそっと彼女に耳打ちした。

彼女は頷いて曲を入れる。

J-WALK『何も言えなくて…夏』。
名曲だ。

彼女が歌い始めると、みんな聞き惚れる。
歌い終わった彼女にみんながハイタッチ。
彼女も少し気が楽になったようだ。

僕は小山さんの隣へ行き、念を押した。

「そんなんじゃないから」

「分かってるって！」

小山さんはそう言ってウインクした。

そして、意味ありげな笑み…。

第84話 彼の周りには…

「なっちゃん歌うまいよね」

そう言って向かいの席に来たのはイチローさん。

「そう！ 今度お祭りのカラオケ大会に出てよ」

口を挟んだのは幽霊部員の佐竹さん。

彼は仕事の都合でソフトには来ないけど、飲み会には必ず顔を出す。

「それ、いいね」

議員の信ちゃんもノツて来た。

トシさんが声をかけると、色んな人がやって来る。

「嫌です！ そんなの」

お祭りのカラオケ大会だなんて…。

ふと彼の方を見る。

彼の周りにはまた3人の女性が…。

第85話 ふと浮かんだのは…

小山さんには彼が上手く話をしたみたい。
でも、ユウ君はちよつと怖い。

歓迎会がお開きになると、彼からの合図。

『一緒に帰ろう』

でも、ユウ君と一緒にいるのが気になる。

私は違う道から一人で帰ることにした。

彼は事情が分かったようで、ユウ君を連れて歩きだした。

二人と別れると、私は家まで走った。

歓迎会の間、ずっとユウ君に見られているような気がした。

彼に相談しようか…。

そう思った時、ふとイチローさんの顔が浮かんだ。

第86話 見張られている…

家に居ても落ち着かない。

誰かに見られているようで…。

「お母さん、これからバレーボールだけど、絶対に窓を開けちゃだめよ」

子供たちに言い聞かす。

バレーが終わって戻ってくると、マンションの近くに人影が見えた。
ユウ君だ！

私は彼から見えないように、外部階段から部屋に戻った。

そつと窓から外を見るとユウ君が辺りを窺っている。

ユウ君は私を見張っているんだわ。

そんなことが何度も続くようになった。

何とかしなくちゃ…。

第87話 相談できるのは…

『今日も暑いね。 夕方ちよつとどう?』

久しぶりにトシさんから誘われた。

でも、ユウ君が見張っているからトシさんとは会えない。

私はイチローさんに電話してみた。

イチローさんは快く相談に乗ってくれると言った。

数日後、イチローさんと待ち合わせた。

マンションの周りにユウ君の姿はない。

指定された店に着くと既にイチローさんは来ていた。

「やあ!」

「すみません」

「何があったの?」

私はユウ君のことをイチローさんに話した。

第88話 そんなこと気にしてる場合じゃない

「本当に？」

イチローさんは驚いている。

「はい。私、怖くて…」

イチローさんは暫く考えて口を開いた。

「警察に通報するべきだ」

本当は私もそうしたい。

でも、ユウ君があることないこと喋ってしまったらトシさんに迷惑がかかるかもしれない。

そんなことになったら…。

それに、子供たちが周りからなんて言われるか…。

「川村さんには話したの？」

「えっ？ 川村さんと私は別に…」

「今はそんなこと気にしてる場合じゃないでしょう？」

第89話 自分から話してみます

「あいつ、川村さんの言うことだけはよく聞くから」

イチローさんは警察に言えないなら、自分とトシさんでユウ君に話をすると言うのだ。

どうしよう…。

ユウ君だって家庭があるし、根っからの悪人だとは思えない。

「私、一度、ユウ君と話してみます」

その後、ソフトの話などをしながら暫く二人で飲んだ。

イチローさんは心配だから近くまで送ると言ってくれた。

私は誰かに見られるのが嫌だったので川沿いの遊歩道からならと応じた。

第90話 私、すごく酔ってる

精神的に参っていたせいか、大して飲んでいないのにすごく酔っている。

気分が悪くなり途中でベンチに座って休んだ。

イチローさんは心配そうに見守ってくれている。

「もう大丈夫です」

立ち上がろうとした瞬間、意識が飛んでよろけてしまった。

思わずイチローさんにしがみついた。

イチローさんとはとっさに受け止めてくれた。

私はすぐに体を離した。

「ごめんなさい」

その後は少し距離を置いて歩いた。
そして、マンションの前で別れた。

第91話 彼女の小さい時は…

雄二主催のバーベキューにソフト部のメンバーが招待された。
僕も彼女も参加した。

彼女ともう一人の女性メンバー結城さんは子供も連れて来た。

「下の子？」

「そうです」

「そっくりだね。お母さん似かな？」

「はい」

彼女も小さい時はこんな感じだったのだろう。

バーベキューが終わってカラオケに流れた。

雄二とヒロと僕の三人。

彼女は子供と一緒にだったのでそのまま帰った。

暫くしてイチローからメールが来た。

『話があるんだけど…』

第92話 彼女には氣をつけた方がいい

イチローはバーベキューには来ていなかった。
メールの後すぐに電話が鳴った。

「今、抜けられそう？」

「大丈夫だけど」

「誰にも言わないって約束できる？」

「もちろん！」

僕は別の店でイチローと会った。

「彼女のことだけど…」

イチローが口を開く。

そして、続ける。

「彼女には氣を付けた方がいいよ」

「どういうこと？」

とりあえず、イチローの話を聞こう。

「彼女は自分の氣を引くためにウソをつく」

「何かあったのか？」

「実は…」

第93話 彼女の価値

イチローは彼女から相談を受けたことを話した。

「どう思う？ 俺は嘘だと思うけど」
イチローは断言する。

それからイチローは彼女が自分に気があるような素ぶりをして
いると話した。

「川村さん、あの子に惚れてるでしょう？」

「お前、何か勘違いしてるよ」

僕はすぐに否定した。

イチローは更にこう言った。

「あの子に深入りしちゃダメだよ。彼女にそこまでの価値はない
よ」

彼女のことはお前には分からない…。

僕は心の中でそう囁いた。

第94話 誘導訊問

彼女の良さは僕が一番知っている。

きつとイチローは僕達のことを妬んでいるに違いない。
しかし、雄二がストーカーだとは信じ難い。

そんな時、雄二から電話があった。

「川村さん、一杯やりましょう」

「いいよ」

ちよっと、誘導訊問でもしてみるか…。

僕は行きつけのパブに雄二を誘った。

「なっちゃんっていいっすよね」

雄二は彼女の話ばかりする。

僕は適当に相槌を打つ。

「川村さん、付き合ってるわけじゃないですよね？」

来たな…。

第95話 後悔

やっぱりトシさんに話をした方がいいかしら…。

ユウ君のこともそうだけど、イチローさんに相談したことも。

私はイチローさんにユウ君のことを相談したのを後悔していた。

結局、結論は出なかったし、彼が私のことをどう思ったか心配になってきた。

少なくとも、あの日の事は内緒にしておいて貰った方がいい。

私はイチローさんにメールをした。

『この間の事は誰にも言わないで下さいね』

しかし、イチローさんからの返事はなかった…。

第96話 俺の女に手を出すな！

「なっちゃんは付き合っていないと言っていました」
雄二は完全に彼女を女として見ている。

「ねえ川村さん、俺ヤッちゃってもいいっすか」
雄二の言葉にさすがの僕も眼の色を変えた。

「冗談はよせ」

「俺は本気ですよ」

真顔で答える雄二。

「無理だよ」

チーム内での恋愛は禁止。
しかし、雄二は聞かない。

「川村さんには関係ないじゃないですか」

僕は立ち上がり雄二の胸ぐらをつかんだ。

「だったら言う。あの子は俺の女だから手を出すな！」

第97話 誤解

その後、イチローさんから音沙汰がない。
私は思い切って電話をかけてみた。

「もしもし」

イチローさんの声。

「浅井です」

「ああ、どうも」

「この間のことでお話したいので、もう一度会ってもらえますか？」

「ごめん、忙しんで」

「少しでいいんです」

「…」

イチローさんは暫く黙っていたけれど、唐突にこう言った。

「旦那がいるんだから他の男を誘惑するな。俺はそういうの許せないから」

そして電話を一方的に切った。

誤解だわ…。

第98話 彼女の話は嘘じゃない

僕は雄二から手を離し、ゆっくりと席に着いた。

「やっぱりそうなんだ」

雄二は僕を睨みつけた。

「川村さん、知ってます？」

「何をだ？」

「あいつ、イチローさんとも付き合ってますよ」

「それがどうした」

「俺、全部知ってるんですよ」

「何が言いたい？」

「俺、あいつの事、見張ってますから」

一瞬“しまった”という顔をする雄二。

それは明らかにストーカー行為を認める発言だった。つまり、それは彼女の話が本当だったということ。

第99話 彼は私の事を分かってくれている

そもそも、最初に言い寄ってきたのはイチローさんよ。

トシさんからメールが来た時に断ればよかった…。

『イチローが相談あるからアドレス教えてだつて』

『イチローさんならいいですよ』

相談は部員同士の喧嘩を収めるのに協力して欲しいということだつた。

それから何度か二人で飲みに行った。

私は酔うと甘える癖がある。

イチローさんにもそんな素ぶりをしたかもしれない。
それだけのこと。

トシさんはそんな私を分かってくれている。

第100話 私は彼だけでいい

トシさんからメール。

ユウ君がストーカーをしていることを教えてくれる内容。

彼の方からきっかけを作ってくれた。

もう、全て話すしかない。

私は彼に会ってくれるようにお願いした。

平日の昼間なのに、彼はすぐに来てくれると言った。

待ち合わせ場所に着くと、彼は既に来ていて二人だけで話ができる場所を手配してくれていた。

それだけ私の事を考えてくれている。

私はそのことが嬉しくてたまらなかった。

私は…。

私は彼だけでいい。

第101話 君の事なら何でも平気

彼女は子供が帰ってくるまでには帰宅しなければならない。
僕は率直に切り出した。

「雄二の事は気付いてたんだね？」

「はい」

彼女は俯いたまま返事をした。

「どうして話してくれなかったんだ？」

「迷惑掛けたくなくて…」

「みいこのことなら何でも平気だよ」

「でも…」

「僕がヤツと話を付けるよ」

「それは少し待って下さい」

「じゃあ、どうすの？」

「…」

彼女には何か考えがあるようだ。

「私…」

彼女は意を決したように口を開いた。

第102話 決意

「私、最終的には法的手段を取ろうと思います」
そう切り出した彼女の言葉には強い意志が込められていた。
僕もそうするべきだと思っていた。

「そのためには、私自身がきちんとしていないと…」

彼女の言いたいことは分かった。

僕とのが公になると裁判では不利になる。

「トシさん、ユウ君に“俺の女”だって言ったでしょう？」

驚いた。

ついこの間の事がもう彼女の耳に入っている。

「ユウ君にそのことも責められたわ。それから…」

第103話 なぜなら君が可愛すぎるから

「それからイチローさんにもこのことを相談したの」
彼女は申し訳なさそうな表情で僕を見た。

「イチローは何だって？」

「警察に言うべきだって」

「そうだろう。他に誰かに言った？」

「ううん、二人だけ」

「イチローにも言われたんだね？ 僕達の事」

「はい。それと、私がイチローさんにも色目を使ってるって…」

「雄二もそう言ってた」

「私はただ…」

「分かってるよ。でも、それはみいこも悪い」

「えっ？」

「みいこが可愛すぎるから」

第104話 念には念を

「そんな…」

「みんなみいこが好きだから、妬んでるんだ」

彼女は恥ずかしそうな顔で僕を見る。

「僕が雄二ともう一度話してみるよ」

「はい」

そろそろ彼女を帰してあげないと子供達が帰ってくる時間だ。

「話が付いたら報告するから」

「お願いします」

「そろそろ帰らないと」

「はい。今日はありがとうございます」

僕は彼女を先に一人で店から出した。

それからしばらく時間をつぶした。

平日の昼間だからありえないだろうが念のために。

第105話 根回し

僕は早速雄二に電話した。

「川村さん、誤解です」

雄二は一連の行動を否定した。
酔った勢いで言ったことだと。
それにしては、話の内容がリアルすぎる。

「信用できないな。しばらく様子を見させてもらうからな」

僕はそう言って電話を切った。

一方で僕は彼女とのことを“何もない”とみんなに思わせるために
根回しを始めた。

『なっちゃんは川村さんの彼女』だというメンバーの思い込みを払
拭するためだ。

彼女が中傷されないように…。

第106話 胸騒ぎ

『その後どう？』

僕はその後、雄二に付きまとわれていないか彼女に確認してみた。

『何もないです』

彼女はそう返信してきた。

『でも、気を付けていてね。何かあったらすぐに連絡をして』

『はい！』

数日後、僕は次の試合の連絡をした。

『優秀選手に選ばれると、僕とお揃いのTシャツが賞品だよ。他の子に取られないよう頑張ってね』

『はい！ 頑張ります。楽しみです』

試合当日。

彼女が来ていない。

雄二も来ていない。

胸騒ぎがする…。

第107話 意味ありげな言葉

彼女が来ていない…。

雄二まで。

まさかとは思うけれど、彼女とは電話も通じない。

「どうかしたの？」

声を掛けて来たのはイチロー。

「なっちゃんと連絡が取れないんだ」

「彼女は来ないと思いますよ」

イチローは意味ありげに言った。

「何か知っているのか？　もしかして雄二と…」

「それは分かりませんが…」

その直後、雄二は遅れてやって来た。
しかし、彼女とは音信不通のまま。

その時、僕の携帯が鳴った。

「もしもし、浅井です…」

第108話 もうイヤ!

試合前日。

イチローさんから呼び出された。

トシさんからも誘われていたけれど、イチローさんと会うことにした。

指定された店へ行くと、橋浦さんもいた。

彼とはフトに入る前から親交があった。

席に着くなりイチローさんが言った。

「あなた、いい加減にしなさいよ」

トシさんとのことらしい。

橋浦さんが続ける。

「お前、いつからそんなヤツになったんだ？」

ピンときた。

イチローさんは橋浦さんに全部喋っているんだ…。

もうイヤだ…。

第109話 私がバカだったわ

「あなたのおかげで川村さんがおかしくなってる」

「確かに最近、変だよな」

二人とも私を責めるように話をする。

私に言わせれば、二人の方がおかしいわよ…。

だけど、そんなことは言えない。

イチローさんは私がみんなにウソをついていると責める。
いくつか質問をして答えさせ“ウソ”だと言う。

でも、それはあなたが言うなと言ったからでしょう。

それなのにこの人は全部自分から話しちゃうんだね。

信じられない。

私がバカだったわ。

第110話 はらわたが煮えくりかえる

この人たちと関わるのもうイヤ！
特にイチローさんは許せない。

最初にイチローさんが私に言ってきたのは橋浦さんと雄ちゃんの喧嘩の事だったわ。

その時は“いい人”だと思ったのに…。
ソフトも優しく教えてくれたのに…。

橋浦さんも、こんなこと言う人じゃないと思っていた。
それなのに…。

「あなたは明日の試合に来るべきじゃない」
「そうだよ。ソフトも辞めろよ」

二人にそう言われて、私ははらわたが煮えくりかえる思いだった。

第111話 やっぱり会いたいよ

昨夜は一睡もできなかった。

あんな風に言われて試合に行かないのは悔しい。
でも、あの人たちの顔は見たくもない。

朝から携帯が鳴りっ放し。

トシさんからなのは分かっている。

ごめんなさい…。

本当にごめんなさい。

ベッドの上で布団をかぶって耳をふさいだ。

「ママ、具合悪いの？」

子供たちが心配して声を掛ける。

「ママ、今日は試合でしょう？」

「大丈夫」

私は布団から抜け出した。

会いたい…。

やっぱり、トシさんに会いたいよ…。

第112話 彼の声はいつもやさしい

私はベッドから抜け出ると時計を見た。
もう、お昼近い。

でも、まだ間に合う。

ユニフォームに着替えて家を出る。

「ママ、頑張ってね」

「うん！ 頑張るよ」

自転車に飛び乗って携帯を手にする。

「浅井です。 今から向かいます」

トシさんはやさしく応えてくれた。

私はペダルを思いつきり踏んだ。

試合会場に着くと、真っ先にトシさんを探した。

すぐに見つけた。

ちよっと気まずいので電話を掛けた。

「早くおいで」

彼の声はいつも優しい。

第113話 来てくれた！ それだけでいい

「早くおいで」

グランドのフェンス越しに彼女の姿を見つけた。

彼女は携帯をしまうと、ゆっくりとこちらに歩いて来る。

「ごめんなさい」

彼女が申し訳なさそうに言う。

でも、いつもの目をしている。

大丈夫だろう。

「遅刻した罰だ。 今日は見学な」

「はい」

来てくれた。

それだけでいい。

何があったのかは聞かないことにした。

試合は1勝2敗。

優秀選手の賞品は次の試合に持ち越しすることになった。

「さあ、打ち上げに行こう」

「はい」

第114話　びっくりしたよ

「乾杯！」

茂がグラスを持ち上げた。

「乾杯」

そして、みんなでグラスを合わせた。

もう、いつもの彼女だ。

打ち上げの会場にはイチローとハシ（橋浦）が来ていなかった。
それで、僕は何となく分かった。

「今日は先に帰ります」

もう一人の女性部員、白石さんが帰る。

「それじゃあ、私も…」

僕は頷いた。

彼女が帰った後、イチローからメールが来た。
僕はイチローのいる店に移動した。

「びっくりしたよ」

イチローが開口一番そう言った。

第115話 これじゃあ、らちが明かない

「彼女、よく来たなあ」
と、イチロー。

「どういう意味だ？」
僕はイチローを問い詰める。

「昨日、彼女を呼び出して話したんだ」
「何を？」

「あまりにも嘘ばかりつくから」
「彼女にだって家庭があるし、身を守るためにつく嘘だってあるだろう」

「身を守る？ そんな感じの嘘じゃないよ」

「じゃあ、何だって言うんだ？」

「男をバカにしている」

「そんなことはない」

「川村さんは彼女に入れ込み過ぎですよ」

これじゃあ、らちが明かない。

第116話 お前に言われたくはない

これじゃあ、らちが明かない。

僕は話を戻した。

「ところで、今日はどうして彼女が来ないと言ったんだ？」

イチローはグラスのビールを飲み干す。

「みんなが迷惑しているから来るべきじゃないと言ったんです」
「それで？」

「彼女は怒って帰っちゃいましたけどね」

「当たり前だな」

そして最後にイチローが一言。

「川村さん、家庭をこわさないで下さいね」

バツイチのお前に言われたくはない。

僕はそう思ったけど、口には出さなかった。

第117話 このままじゃ彼女が可哀想

イチローの話はひどいものだった。

ついこの間まではなっちゃん、なっちゃんって夢中だったのに。女の子相手にそこまで言うとは…。

イチローの言うことは分からないでもない。

ただ、もう少し、彼女の身になって考えられないのか…。

まあ、人にはそれぞれの考え方がる。

それをとにかく言っても仕方ないか。

しかし、このままじゃ彼女が可哀想だ。

翌日、僕は彼女にメールした。

『イチローから全部聞いたよ』

すぐに彼女から返信…。

第118話　　こういうのって、いつも女が悪く言われる

彼女からの返信メール。

『電話してもいいですか？』

すぐに僕の方から彼女に電話した。

「ちょっと会える？」

「はい」

彼女が指定した隣町の店で待ち合わせた。

僕が店に着くと彼女は既に来ていた。

「何を聞きましたか？」

不安そうな顔で彼女が聞いた。

僕はイチローから聞いたことを細かく話した。

「こういうのって、いつも女が悪く言われるのね」

彼女の目には涙がこぼれかけている。

「僕にも責任がある」

僕と会わなければ、彼女は…。

第119話 もう、誰も信じられない

「私は普通にみんなとお酒飲んで、ソフトやっているだけなのにどうしてこうなっちゃうんだろう？」

涙が彼女の頬を滑り落ちていく。

「みいこは悪くない。全部僕のせいだ」

僕が誘わなければ彼女がこんな思いをすることもなかっただろう。僕はそっと彼女の肩を抱いた。

「違います。私が女だから、みんなそういう目でしか見ないんです」

彼女は声を震わせながら言う。

「もう、誰も信じられない…」
そして、彼女の涙がテーブルに落ちた。

第120話 彼女は母親

「僕だけはみいこの味方だから」

「ダメです。 そんなことをしたら今度はトシさんが標的にされるから」

「いいさ。 いっそ、二人で辞めるか」

「それは嫌です。 このまま、あの人達に屈したくはないですから」
涙はまだ止まっていない。

「私が負けたら、子供達にまで悪い影響を与えるわ」
やっぱり彼女は母親だ。
母親は強い。

「みいこは強いな」
僕は心からそう思った。

「トシさん、今まで通りにして下さいね」
「分かったよ。 可愛いみいこ」

第121話 やっぱり悔しい

彼女の話とイチローの話はいくつか食い違ふところがあった。どちらが間違っているのかなんてどうでもいい。彼女に対する僕の気持ちは変わらない。

店を出るときには彼女に笑顔が戻っていた。僕達は店を出たところで別れた。

翌日、彼女から電話が入った。

「やっぱり悔しい」

考えれば考えるほど悔しくて、夜も眠れないと言う。

1時間ほど話したら、彼女は落ち着いたようだ。

しかし、話が終わって電話が切れると僕は急に不安になった。

第122話 変化

男の人って、サバサバしているのだと思っていた。
どうして放つといってくれないのかしら。

この町の人って、そうなのね。
地元意識が強いんだ。

『ここじゃ、プライベートはない』
茂さんが言っていたわね。

何だかくたびれる。
ここで暮らすのが面倒になって来た。

ダメダメ！
私が弱気になったら、子供たちが不安になる。
子供たちが独り立ちするまで頑張らなくちゃ。

トシさんとも少し距離を置いた方がいいかしら。
彼なら分かってくれるわ。

第123話 言いたいことが言いだせない

彼に話してみよう。

彼は私の気持ちをきつと分かってくれる。

私がメールをすると、彼はすぐに電話をしてくれた。けど、どう話せばいいんだろう…。

彼の声を聞くと、つい甘えてしまう。

彼が私のことをとても心配してくれているのが分かるから。

愚痴や取りとめのない話で一時間も経ってしまった。仕事中なのに彼はずっと付き合ってくれた。

結局、言いたいことが言いだせなかった。

これじゃあ、かえって彼を心配させるだけじゃない。

第124話 彼は心配しているだろうな…

大会の後は次の練習日まで1カ月ある。

その間、私はバレーの大会がいくつかあって忙しかった。

彼とはほとんど接触がなかった。

と、言うより私が彼に連絡する暇がなかった。

色んな連絡事項をメールするのは疲れる。

私はこういうことが苦手。

それをサラッとこなす彼はすごい。

改めてそう思った。

実は、彼からは色々メールが入っている。

だけど、全く返事をしていない。

日々の生活に追われて余裕がない。

彼は心配しているだろうな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135u/>

好きになってもいいですか？

2011年10月21日11時58分発行